

平成 2 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720069

研究課題名（和文）中世イタリア観相学思想に基づく視覚表象文化の再検討

研究課題名（英文）Studies on Culture and Visual Representation of Physiognomy in Italy during the Middle Ages

研究代表者

黒田 加奈子（Kuroda, Kanako）

千葉大学・人文社会科学研究科（系）・人文社会科学研究科特別研究員

研究者番号：90571604

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円、（間接経費） 660,000 円

研究成果の概要（和文）： 古代ギリシア以来の伝統を持ち、中東地域での発展を経て12世紀以降のイタリアで復興した学問のうち、医学や占星術思想と密接なかかわりを持っていた観相学思想と、その周辺において成立した図像群の主題や表現形式との関係性を、改めて検証した。観相学思想が同時代に再興される文化的背景を明らかにするとともに、とくに13世紀半ばに成立した二つの観相学を論じた著作の内容分析を行い、それらの内容が図像群に影響を及ぼしていること、また著作の内容そのものに中東地域における発展の痕跡が見いだせることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）： This study is focused on astrological images in 13-15 centuries Italy. I analysed the medieval physiognomic texts, Liber Phisionomiae of Michael Scot(ca.1175-ca. 1232) and Compilatio physiognomiae of Pietro D'Abano (1250-1318). Iconographically most astrological images related on manuscript images of 'new' science from the twelfth century Renaissance. Physiognomy was one of these new sciences from Ancient Greek. It influenced to images which represent as planets, zodiac, and people who was influenced by planets as know as 'planet-children'. The Arabic tradition from the twelfth century Renaissance, clearly remained with some details of these physiognomic texts.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：観相学思想 イタリア 美術史

## 1. 研究開始当初の背景

報告者は、12世紀ルネサンスにより再興した天文学(あるいは占星術)思想が、視覚表象文化に与えた影響という問題に一貫して取り組み、学位論文(2009年)では、北部イタリアの自治都市国家であるパドヴァに着目し、パドヴァ大学で教鞭をとった医学者・天文学・占星術学者のピエトロ・ダーバノ(Pietro D'Abano: 1250-1318)の著作に代表される新たな知の体系が、自治都市国家の生み出す視覚表象(公共建築パラッツォ・デッラ・ラジョーネを装飾する巨大壁画)の表現形式に影響を与えたことを明らかにした。

12世紀ルネサンスにより活発となった、挿絵を伴う天文学・占星術著作の発生とその流布が与えた視覚表象文化への影響は、ザクスルをはじめとするヴァールブルグ学派によって後世の研究道程が開かれ、Dieter Blume, *Regenten des Himmels* (2000)に代表されるように個々の挿絵の様式的検討と影響関係を深化させる研究が続々と排出されているが、議論が出尽くしたという状況ではなかった。

この視覚表象文化への12世紀ルネサンスの影響という問題への取り組み、とくにピエトロの著作に対する研究の過程で、観相学思想に着目するに至った。観相学思想は、医学の発生・発達と共に、身体の外見に表れる病相の兆候を判断する医学的な経験則から出発し、人体の各部位、顔面の造形、身振りなどから各人の内面や性格を判断するという偽科学の一部となった。くわえて、身体を、大宇宙を構成する一部としての小宇宙とみなす視座が、「天体に影響を受ける人体」という見方へ発展し、これが占星術思想や観相学思想とも結びついてゆく。

これまで中世からルネサンス期にかけての占星術図像の図像源を探る研究の歴史上では、観相学のテキスト内容そのものの影響が論じられてきたことは管見の限りでは多くはなかった。

## 2. 研究の目的

上記の研究背景を踏まえて、前述のピエトロの著作であり、マントヴァ・コムーネの行政長官(カピターノ・ジェーネレ)に捧げられた『観相学概要』(1295年頃)や、この時代周辺に成立した観相学に関連する著作群の内容を分析することにより、これまでの研究において報告者が深く関わってきたパドヴァのパラッツォ・デッラ・ラジョーネの壁画や、そのほかの地域で成立した占星術図像、あるいはテキストが流通したと考えられる地域の視覚表象文化に何らかの影響を及ぼした可能性を仮定し、その可能性についての再検討を行うこととした。とくに、パドヴァのパラッツォ・デッラ・ラジョーネの壁画は、いまだに主題不詳とされる部分も多く、その解釈を進めるための好材料となるとも仮定している。

本研究によって、13世紀以降の視覚表象文化におけるジェンダー観、視覚表象をうみだすにいたる注文主あるいは制作者の持つ他者へのまなざしを浮き彫りにすることができると想定した。

## 3. 研究の方法

本研究は、12世紀ルネサンスにより「再興」された学問の一つでもある観相学について論じたテキストのうち、とくに二つの著作、ピエトロの『観相学概要』、ならびに、スコットランド出身の占星術学者、翻訳者マイケル・スコット(Michael Scot: ca.1175-ca.1232)により、パトロン関係にあったシチリア王フリードリヒ2世(在1220-1250)に捧げられた『観相学の書』(1230年頃成立)の内容分析をおこない、同時代以降に成立した占星術図像、とくに「惑星の子供たち」と呼ばれる図像の表現形式における影響関係を再検討する。さらに、他の視覚表象への影響関係も検討していものである。

このため、まず、再検討を行うための枠組の充実と検討材料の収集と整理をおこなう。

まず、二つのテキストの原文を科学研究補助金を活用して探索、入手し、その内容の検討を行う。写本の所蔵先のあるパドヴァでの現地調査を行う。

さらに上記テキストの成立背景を明らかにするために、観相学思想の成立とその流布の状況について文献を渉猟することにより分析を行うこととした。とくに、二つのテキストが成立した13世紀イタリアにおける、観相学の歴史的な位置づけや、隣接する学問領域である医学との関係性、さらにその知識が流布する原動力の一つとなったと推測される、大学教育における位置づけなどを視野に入れて調査を行う。

同時に、マイケル・スコット研究、および観相学の科学史における研究状況について知るために、海外の研究者との意見交換を行うこととした。

検討材料を効率的に収集するために、インターネットを通しての文献・資料購入を行うと同時に、国内では入手しにくい文献や資料を、各年度に行った10-20日間の海外調査を通して入手することとした。とくに、占星術図像学研究に関する図書と図像資料では圧倒的蔵書量を誇るロンドン大学ウォーバーク図書館では、同図書館の持つ占星術図像コレクションの複製を得るとともに、関係する図版の探索を行う。また、イタリア美術史に関連する蔵書を多く有するフィレンツェ美術史研究所では、美術史と観相学思想の関係性を論じるケーススタディや、関連文献および図像の収集をおこなった。

検討材料の収集度合も鑑みて、視覚表象検討の調査地を選定することとし、最終的にパドヴァを検討対象地とした。これは、これまでの報告者の研究成果との統合がしやすいこと、および観相学思想の位置づけを探る上

で、観相学テキストの著者の影響を論じることのできる視覚表象が、他都市において確実に発見できなかったことに由来する。最終年度には、大学教育における観相学思想の位置づけ、および視覚表象の伝播の系譜を検討するために、ボローニャでの調査を集中して行うこととした。

#### 4. 研究成果

平成23年度(2011)は、観相学思想そのものの構造と文化史的背景を分析するための枠組の構築・補強と、検討材料の収集を積極的に行った。

まず、1.で述べた観相学思想への着目のうち、この着眼点を深化させる契機となった研究を総括した。山崎明子、新保淳乃、池川玲子、千葉慶各氏との、東西美術史における時代を通じた「乳房の表象」に関する共同研究に参加し、その成果となる『ひとはなぜ乳房を求めるのか 危機の時代のジェンダー表象』(青弓社、2011)において、「古代から中世の科学言説にみられる乳房/乳についての議論」として総括したもので、女性身体、乳房イメージが、医学的言説を通して固定化されていく過程において、観相学思想が大きな役割を果たしているという知見を得るに至った。

さらに、12世紀ルネサンスに至る観相学の系譜とその構造自体の把握につとめ、国内で入手できる文献の入手、検証を行った。

平成24年1月8日から17日の計9日間にわたり、ロンドン大学ウォーバーク研究所での調査を行った。

この調査では、国内で入手困難であった観相学に関する先行研究の閲覧・入手を行うことができた。とくに、観相学と美術研究の方法論ケースの検証という視点もあわせ持って先行研究を渉猟し、学外では公開されていない、同大学に提出された修士論文等の閲覧も行うことができた。

また、とくにマイケル・スコットにおける観相学思想の研究動向を知るために、同研究所においてヨーロッパ科学史におけるイスラム世界の影響について研究を行い、マイケル・スコットに関しても数多くの論考を発表しているチャールズ・バーネット教授に助言を仰いだ。現存するマイケル・スコットの一次史料と現在の研究動向、また対象時代の占星術図像における観相学的研究の可能性について、同氏と意見交換を行い、結果これまでの調査では対象としていなかった、一次史料についての示唆を受けた。この結果、美術史における観相学的研究の動向についておおむね把握し、テキスト入手と解釈を行う史料の対象を拡大することとした。

さらに、占星術図像学の先行研究へのキャッチアップを行うことができ、かつ同研究所の写真図書館において、占星術に関連図像の収集をおこなった。デジタル化の進んでいない画像についても、デジタル写真撮影を行う

ことができた。

二年目となる平成24年度(2012)は、前年の研究動向把握を踏まえ、実際の対象を選定し研究を進めること、および分析対象とする『観相学概要』『観相学の書』の原文入手に努めた。

イタリアにおいて検討候補地として考えているパドヴァでの現地調査を、9月1日から20日の計20日間行った。

本調査では、パドヴァに観相学思想が伝わる経路を史料からとらえ、かつ研究対象の候補であるパラッツォ・デッラ・ラジョーネおよび関連する事象についての研究の最新動向の把握に努めた。聖アントニウス教会付属図書館において、観相学思想の原典の一つとされるアリストテレス写本の所蔵を確認し、書誌学的情報を得たうえで閲覧と複写を行った。先に記した最新研究動向の把握に関しては、とくにパドヴァ大学のジョヴァンナ・ヴァレンツァーノ教授の助言と助力を得ることができた。

加えて、美術史における観相学研究の先行研究を渉猟するため、フィレンツェにある美術史研究所での調査により、観相学的アプローチをおこなう先行研究の渉猟を行った。この結果、レオナルドをはじめとする、ルネサンス期以降の作家および作品については多くの情報を得ることができたが、13世紀以降の観相学思想の流行により生み出された作品群についての研究は少ないことが明らかとなった。

これと並行し、前年度および当該年度に収集した成果を一部整理し、千葉大学人文社会科学部科学研究科特別研究員として参加していた同研究科主催の研究プロジェクト報告書『空間と表象』に「中世ヨーロッパの観相学研究

北部イタリアの視覚表象解釈のための覚書」として、12世紀ルネサンスにいたる観相学思想の発生とその流布の経緯についての論考を掲載した。

最終年度となる平成25年度(2013)は、テキストの内容分析と、調査地を選定し、調査地で制作された図像例を収集・整理・検討した。

前年までの調査を踏まえ、調査地とする都市をパドヴァとボローニャと選定し、同地で制作された図像の収集と、二都市間の図像伝播、大学教育における影響関係などを視野に入れて現地調査を行った(8月28日~9月20日の計24日間)。また、これまで調査の日程の関係上入手できていなかったピエトロ・ダーバノの『観相学の書』の写しを入手するため、フィレンツェ国立図書館での調査を行った。

さらに、フィレンツェ美術史研究所で、改めて関連文献を渉猟するとともに、ボローニャでの調査を行うための美術史上の基礎情報を入手することに努めた。

つぎにボローニャへ赴き、中世美術館、アルキジナジオ図書館およびボローニャ大

学図書館を中心に調査を行った。同地は、ピエトロ・ダーバノが活躍したパドヴァ大学のひな型といえるボローニャ大学が位置する。また、ピエトロおよびマイケル・スコットが訪れていた地でもある。ここでは、まず、当該時期のパドヴァとボローニャの美術史上の関係性についての文献を渉猟することに努めた。ついで、ボローニャ大学における観相学に関連する授業、教師の有無とその状況、授業教科書を中心とする写本の制作状況を調査した。また、写本を中心とする図版の入手を行った。

国内における作業では、これまで収集した文献の精査とともに、入手した史料読解を進めた。また、先に記した『観相学の書』は、モデナ市を支配したエステ家に由来する史料である。一部がピエトロに由来し、その他の部分は複数の著者の存在をうかがわせるものであることが判明していたが、内容の解読を進めたところ、同じエステ家が所有したフェッラーラ市にあるパラッツォ・スキファノアの壁画にもみられる、中東地域に由来する思想の影響がみられることが判明した。その成果を2014年3月に論文「中世ヨーロッパの観相学研究(二) 二つの「観相学の書」について」として上梓した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

黒田 加奈子「中世ヨーロッパの観相学研究(二) 二つの「観相学の書」について」上村清雄編『歴史＝表象の現在』(人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書279集) 査読なし、2013年、1-17頁。

黒田 加奈子「中世ヨーロッパの観相学研究—北部イタリアの視覚表象解釈のための覚書—」上村清雄編『空間と表象(2011～2012年度)』(人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書259集) 査読なし、2013年、17-29頁。

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計1件)

山崎 明子、池川 玲子、新保 淳乃、千葉 慶、黒田 加奈子『ひとはなぜ乳房を求めるのか—危機の時代のジェンダー表象—』、青弓社、2011年8月。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：

番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

黒田 加奈子 (KURODA Kanako)  
千葉大学・大学院人文社会科学研究科・人文社会科学研究科特別研究員  
研究者番号：90571604

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：